

# 私にとって吉野川って何だろう？

吉野川流域市民基金 事務局長 川越敏良

何時から、吉野川を意識するようになったかという、何と云っても、第十堰の可動堰化の是非を問う住民投票が大きな位置を占めている。

それまでは、さほど吉野川を意識することはなかった。子ども時代に何度かボラ釣りをした記憶と、高校生時代に学校が吉野川に近かったことから冬の寒い時期に吉野川の堤防を利用してマラソンをさせられたいやな記憶と、若い頃に四国出身という「ああ、四万十川がありますね」と言われるのに、「いやいや、『四国三郎』と異名をとる日本で三つ目の大川である吉野川があります。」と対抗心でいう程度のことであった。



その吉野川が、全国で初めて公共事業をめぐってその是非を問う住民投票の舞台になるとは想像だにできなかったし、2000年以降暫くの間は、徳島出身という、「ああ、あの住民投票をしたところですよ」と言われ、少し鼻を高くした次第であった。

95年頃から、今は亡き姫野などを中心に第十堰の可動堰化計画に対する問題提起がされはじめたころ、私は公務労働者を対象とする労働組合の役員をしていた関係から、環境を守るという視点だけでなく、市民目線の公共事業のあり方や、住民(市民)運動と労働運動の接点のあり方などのいくつかの切り口から、「これは絶対関わりたい」という思いがつのり、『住民投票の会』に関わったことが吉野川に関わるきっかけである。

それ以降、受任者集めに始まって、住宅地図をコマ割りして署名集めなどに取り組んだ投票条例制定要求やその後の市議会議員選挙、また具体的な住民投票への取り組みや市長選挙等々、様々な方々と関わって活動をさせていただいたことも思い出深いですが、何よりも様々な方々を知り、交流させていただき、視野を広げることができたことは、大げさではなく、人生を豊かにすることができたと思っている。



それ以降、時代の流れとともに運動のあり様や組織は変遷してきているが、ヒトに嫌がられながらも(多分)、しつこく吉野川に関わっていることの背景だと思っている。

そのように思えば、私にとって吉野川とは、いろいろな知識を教えてくれた先生であり、様々な人と交わり、豊かな視野を養っていただいた師匠みたいな存在だと思っている。

これからも吉野川の悠久の流れとともに、新しい人たちとの交流を通じて、様々な経験ができることを楽しみにしている。